

●挑戦心を忘れずに…

実猟作戦 創意工夫

神奈川県

田宮 治

「子供叱るな来た道じゃ、老人笑うな行く道じゃ」とはよく言ったものである。人間だれでも生まれ育てられ、恋をして家庭を持ち、老いてゆく。そんな中で、良い趣味を持って幸いに極められたとしても、行きつく所は同じ様である。

人は運命とか定めのような事で、どうしようにも動かし難い先天的な事と、そうではない後天的な事がある。当然の事であるが、先天的な事に対しては、その人なりの「生きざまであり」「どの様に生きよう」と努力したか」が重要である。人はどんな状況にあっても「満足したり」「なげ出したら」おしまいである。満足は成長が止まった事である。何事においても生あるうちは「挑戦心」を忘れてはならない。そんな事を前提に今回のテーマである「実猟作戦」を述べてみたいと思う。

◎健康への創意工夫

私の猟は今猟期も基本的には猪の単独猟である。いつものように愛犬群をひきつれ、妻と孫でのんびりと楽しみたいと思っている。この歳になると、まず第一に注意しているのが健康面である。猪の

単独猟ともなれば、正に「真剣勝負」であり、「まったなしの戦い」なのである。若者のようなわけにはいかないが、常日頃から体を動かす事や栄養面にも気を付け、好きな酒もひかえるようにして、どんだん手足を使う事である。

具体的にはやっぱり実戦よろしく山に入り犬をひく事や犬舎そうじなどで、よい汗を流す事であるが、たまには頭も使わない事には忘れっぽくなり困るので、歳に応じたトレーニングをきちっとする事である。猪との実戦では、歳などと言っておれないし、猪もまた手心など加えてはくれないのであるから、猟場に立ち続ける以上はいつも現役バリバリでなくてはならないし、勝ち続けなければならぬのである。

単独猪猟はあくまでも自分だけが頼りであり、目の前で起る何事も即決・実行しなければならぬ。納得出来る猟をいつも平然とやつのけるのは、なかなか大変な事なのである。山に出て山を知る、猪の行動を知る。絶えず体を使う事で体調を知る。要するに猪のなんたるかを丸ごと知り尽くしていない事には単独猪猟など出

来ない相談である。

単独で猪がとれるのは何事も知り尽くした上で完璧な猟技があれがこそ出来る事で、納得の猪猟をいつでもやって見せる事はたやすいいものではない。

◎猪犬の創意工夫

そんな「たやすくない猪犬」を容易にしてくれるのが「猪犬」なのである。当然の事であるが「創意工夫」している2番目は「猪犬」である。単独猪犬では猪犬の芸が



これが10カ月の若犬。2頭とも頭に行く。咬一番犬になると思う。手前がクロとゲン号の子、ヨシ号。奥の赤がチヒロとブルの子

物を言うのである。たとえ達人がどんなに頑張っても、一流芸の猪犬なくしては猪など撃ちとれるものではない。

こんな難しい猪犬をいとも簡単にこなす為に、猪犬を創意工夫し続けて来たのである。そんな中で「実猟作戦」と言ってみても私の場合は、あくまでも「我流」であり、「俺流の猪犬」である。父や兄からたたき込まれた猟道を基に、先達の教えや本誌などを参考に犬群を引き、山入りを繰り返し、実



「若犬10カ月の芸」赤と黒は必ず頭へ行く。後ろ足へ行っているのはヨシ号(クロ)の兄弟犬ハヤト号

戦で覚えた猪犬の体験がすべてである。

失敗や挫折の中で長い年月をかけてやっとたどり着いた「あの手・この手」である。これを自分が求めている猪犬と確信が持てる「一手」を拾い集めて「束ねて置いた秘策」をその時々状況に応じてひもとき、使い分けているのが現実である。

どうしても好きな猪犬を続け、「納得の猪」や「こだわりの猪」を望むのであれば、猟場であれ猪犬

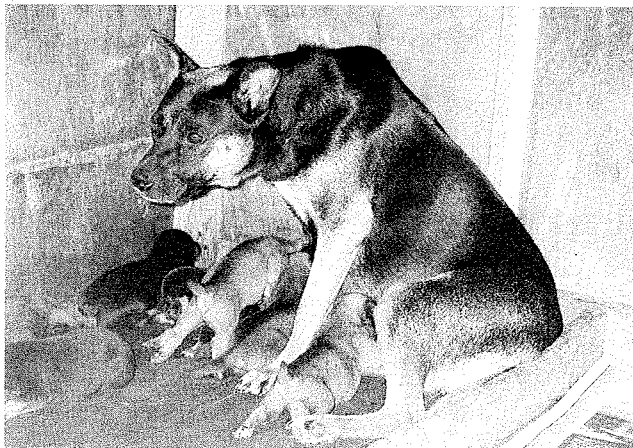


山猪で繰り返す繰り返す仕込むこと。10カ月でこまやれ犬なら、1頭でも行くし左若こまでやれ2頭が頭にしつこく攻撃。猪はもうダウン。若こは山で小問題から。小物を咬み切れれば、倍の大きさに。小物を咬み切れれば、倍の大きさに。

◎狩猟界を取り巻く変化

狩猟を取り巻く状況も変わってしまったように感じられる。自然破壊ばかりではない。人の常識や物事の道理、そして考え方もでも全く信じられない流れとなっ

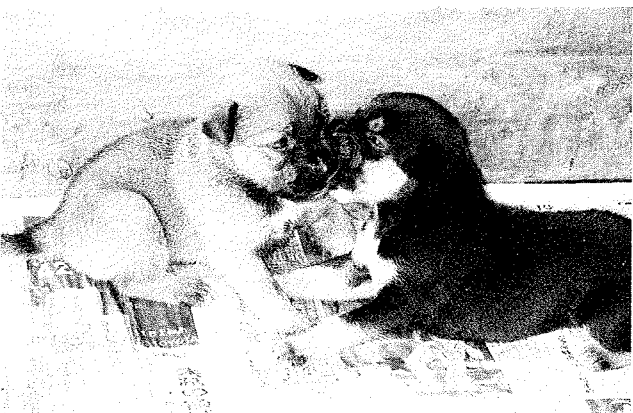
であれ、狩猟方法・健康管理に至るまで、あくまでも自分に合うものに創意工夫しなければならぬ。昔を偲びなつかしく想い出にひたすような状況は、もうどこにもないのである。



同じ組み合わせで4腹4年目。毎年すばらしい猪犬になっている。母犬クロ号、父犬ゲン号。訓練犬10カ月のヨシ号、ハヤト号は昨年の子



犬はこのくらいの時より手を掛けることである(30日目)。手数を掛けた分、良い犬になるようだ



左は子犬時のハヤト号。クロは子犬時のヨシ号

人として当たり前の事として猪犬をいつくしみ育ててきたものだと考えている。いやしくも愛玩犬のように、商売的に考えている人など1人もいないはずである。確かに以前から「法」そのものはあったそうであるが、改めてそれでは「犬舎登録」をと思いい立ちびつ

ている。当然の事、このような流れはそれに逆らう事なく、その時々々に努力して乗り越えて進まなければならぬと思っているが、世界的に悪化する「自然破壊」とか

「人間のモラル」などは、どう考えても一人の力などの及ぶところではなく、国の行政を待つしかないと思うのだが、その行政さえも「良い方向にある」とはとても信じられないのである。

たとえば「有害捕獲」に「自衛隊」を使うとか、熊などに見られ

る駆除のあり方。そして有害捕獲の方法(やり方)そのものに、もっと狩猟人の意を取り入れ本気で考えて欲しいものである。高齢化する猟界は行政の助けが正に必要なのである。

そんな時期に突然つきつけられた「犬舎問題」である。私はごく当然の様にもう20〜30年前に「全猟」には犬舎登録をしていたし、

歴史にあつても、猟犬は絶えず人のそばにあつた。当然の事であるが、猟の成果も喜びも猟犬と共にあつたはずで、猟人一家を支える名犬だつて多くあつたと思うのである。

「大切だから守ろう」と思つても、今回の法では「1頭の子犬も許可なくば売れない」「10頭以上は飼う事も出来ない」のである。最近本誌の紹介欄でも明らかのように「申請中」とあるのが、猟人の心を物語るもので、だれもが

りした。「その資格がない」との事である。

その資格は「全国ペット小売協会」でとつてくれと言うのである。「エツ」と言葉に詰まる。全国ペット小売協会などの団体で、我々

猟人に猟犬の何を教えてくれると言うのか。少なくとも法の定める事を忠実に守りぬき10年以上、ライフルまで持っている。経験だつて猟犬に関して言えば十分である。そんな実績も全く通用しないのである。我々猟人はだれが見ても



つなびきの現場。子犬の訓練はこれが基本だが、山には入らなくてもこんな場所でも十分。我が家の前の散歩道。巨人軍グラウンドの下



“つなびきがすべて。おとなしいのも猪犬の大切な条件”（つなを引くのは妻）



期待の若犬 8カ月の訓練。二郎号と武蔵号

狩猟人口が少なくなつたとか、高齢化など大変な時ではあるが、我々狩人は天命と思ひ、全力を尽したいものである。当然の事、人家近くが狩場となれば今までの様な奥山での狩りとは比べものにならない。危険も隣り合わせであり、猟に

「プロ」であり、猟犬と共にあり続けてきた。その事実も実績も人格さえも打ち消されているのである。正直「この俺に、だれが猪犬の何たるかを教えてくれるのか!!」と、どなりたい思いである。「駄々をこねて何とする」。どんな「法」でも「法」は「法」。きちっと守りのり越えてゆかなければならないのである。

どんなに頑張っても1人の力ではどうする事も出来ない。猟人の「プライド」も「猪犬ならば」の自

信もたたきめされた思いである。それでも好きな猟は続けたい。せっかく作った愛犬はなんとしても守ってゆきたい。「何糞魂」に火をつけ、私なりにこの問題も乗り越える事が出来た。「守りますよ。どんな法でも……」「銃を持つて狩猟をする以上は……」。

それにつけてもこのような時に猟友会や関係団体、業界誌はなぜ動いてくれない。決して困った時のために入っているのではないけれど。せめて猟人の心が行政に反

◎何糞魂

映される様になぜ動いてはくれないのか、誠に残念な事である。

どんな事が起ろうと、人に何と言われようと、絶対に変えてはならないのが「信念」である。今までやってきた「体験」こそ「宝物」であり、真実を伝えてくれ、進むべき方法をあみ出してくれるのである。

狩猟界を取り巻く状況は正に存亡の危機である。猟人一人ひとり

が今こそ何糞魂を發揮する時である。猟が好きで、猟犬が好きで守ってゆきたいのであれば、まずもって置かれている立場を自覚する事であり、その思いを1つにする事である。

「法」が我々猟人をどう規制しようとして、創意工夫さえすれば、必ず乗り越えられるはずである。幸いな事に猟人は今こそ出番なのである。自然破壊や過疎になった農家では鳥獣被害に困りきつているのだ。そんな事から猟人は望まれる期待されているのである。



山彦犬舎。最高のゲン号(左)×母犬サクラ号の子犬が平成19年9月7日に生まれた。ゲン号は先犬



左はブルの子で芸もブル号そっくり。右は咬一番に成長したヨシ号



すばらしい足咬みのハヤト号(右)と富士号(左)

当たってはくれぐれも安全を第一に考え、農家・住民を思いやる心が大切である。

私が猪猟している関東地方の狩場では、奥山の良い所には猪は少なくなり、代わりに鹿やカモシカが増えすぎ、森林は荒され放題で彼等の天国の様になっている。

猪は申し合わせたように人家の周りに住みつき、農作物の味をしめ、あたかも人様を盾にしている感がする。こんな状況であるから、猟人は人格とプライドをかけ猪犬を仕上げる事である。これは思っている以上に大変な事であるが、「人畜無害の安心で安全な狩猟」

は、「獵人」と「猪犬」の「絶対条件」になるからである。私は本誌に、この辺の事を以前から述べさせてもらってきたが、これからはさらにそんな猪犬の出番である。どんなに良い芸をする犬でも、人家によりつき「悪さ」をしたらそれこそおしまいである。このように犬を山に引き、仕上げる中で、きちっと自分の考える条件に適應するよう訓練するのであって、限りなく自分の能力に合う事であり、自分の猟法に合う猪犬を創意工夫して、作り、育て、使っているのである。そして大事なものは、そんな愛犬が十分力を出しきれぬ猟場、

特に人家の近くのごく狭い場所でのピンポイント攻撃が出来る事が重要である。

どんな猪犬であっても、愛犬の芸が獵の決め手であるので、毎年子犬の仕上げには思いきり力が入る。特に今年は暑く大変であったが、そんな猟事情を思い浮かべ良い汗を流してきた。その甲斐あって、やつと1歳になる若犬5頭は、写真の通りバリバリの咬芸を覚え、一軍入りである。「どこに出しても恥ずかしくない」犬に育つてくれ、ほっと一息ついているところである。

何回も言ってきた事であるが、

猪犬をどう評価するかは当然の事、人それぞれで全く自由である。あくまでも私に合った猪犬を作って、自分の猟法に合うように獵体験を基に訓練しているのであって、要約すれば自分1人でいつでも猪のとれる事を教え、仕上げていのである。70歳でも全く同じ考えである。

だれが何と言おうと「人前に出して恥かしくない犬」と思っているし、そんな猪犬を、人生をかけて作ってきたのである。幸いな事に本誌のおかげで、全国の獵人から沢山の共感を頂きました。特に関東地方の獵人からは共獵のお招きを頂き、現実に猪を追い、撃ちとって「猪犬感」や「猪獵を語り合い」楽しんでいられる。全くもってありがたい事であり、感謝している。それもこれも愛犬達のお蔭と、子犬達の縁である。私は好きな狩猟を守るのには、この子達を守り育ててゆく事だと信じている。

この道がどんなに変わろうと「何冀魂」をもって乗り越え、決して絶やしてはならない。信じ守ってきた大切な「生き甲斐」の道だからである。